

日本が中国に勝つ方法 その2

～ここが弱いよ ニッポン～

絶対音感とか絶対食感とか絶対語感とか身につけるとその後素晴らしく能力を発揮しやすい。運動にも絶対運動能力感覚なるものがある。しかも、8～9歳程度までに付けさせる。いくら遅くても小学校までに身につけさせるのがベストである。

絶対運動能力感覚を小学校課程終了までに付けさせる。ここが日本の弱点ではないだろうか。飛び込み競技の立場から見ていただければ、絶対的に運動、動き、型にはまった動きが不足している。選手たちは飛び込み競技の練習は一生懸命にやっているがその他の動きの感覚を果たして練習に取り入れているか。

小さいから危ないとか、指導が行き届かないとかいろいろあるにせよ、日本の制度上の問題なのかもしれないがそんなことを言っていたらいつまでたっても勝てない。それともう1つは、飛び込み競技の協力者がまだまだ少ないという現状である。協力者がいればとくに小学校レベルの運動感覚をつけることもできよう。今は、指導者が見つけた才能のあるらしい子どもを練習環境が変わるまで見続けている。指導者も「選手が心配だ。」とか言って大事に扱っている。指導者が1人であれば、良い面もあるかもしれないが指導が一辺倒になってしまう。言われたことをやればよい。自分の考え方に入る隙間もない。すると選手は次第に離れようとする。指導者と選手との考え方が一致していればよいが、していなければこのような工程をたどることが予測される。要するに指導者が不足している何物でもない。練習環境が変わらないでも中学生、あるいは高校生になったら次の段階へ行くというシステムをつくり上げる。環境をあえて変えていくという事はそれだけ選手の持っている身体の面、心の面などの物事に順応していく体質をつくるという事だ。地域のダイビングクラブや日水連中央合宿などの実施方法も考える必要がある。

子供たちが好きなスポーツといえば、サッカーとか野球である。女の子であればバレーボールとかバスケットボールであろうか。そういうボールを扱う、ボールをコントロールすることによって身体を動かす。ボール感を養う事も飛び込み競技のトレーニングとして大切である。それとこの時期につけさせたいことは集団のなかでの自分のエリアを持つという事である。それにはコミュニケーション能力をつけることが大切である。ボール感というのはリズム感と深くかかわりがあると思うからである。正しいタイミングをつかませるときなどリズム感がないとできない。リズムを身体で表現するのである。この時期の強化トレーニングが充実したものになれば、飛び込み競技以外にもどのような競技をやっても基礎ができています。その競技の専門的なトレーニングにもついていくことができる。

現在、日本でこの時期の競技といえばジュニアオリンピック大会がある。各ブロックでの各年齢制限の選手が何人いるでしょうか。おそらく10人に満たないところがほとんどでしょう。この子供たちを集めて大会で競い合わせてもなんか盛り上がりに欠けてしまう事や「全国大会にやってきたぞ。」という感覚にも欠けるのではないのでしょうか。競い合う中でライバルを見つけ、いいところを学ぼうとすることこそ自分自身の向上なのではないのでしょうか。

そんな意味で中四国オープン大会をつくり上げた。まだまだ、この大会は未完成なのですが昨年は55名の参加者があり、毎年60名近い参加者がある。故古橋広之進氏の地元東海ブロックの静岡・浜松では「とびうお杯」という大会が実施されている。すでに25回を超えている。このような大会が日本全国にもっと広がっていけばよいと思う。

いずれにしても、小学校課程の時期での様々なトレーニングが充実していないのが現実ではないでしょうか。

(2011, 2, 21~22)